

退官者のひとこと

退官にあたって

昭和50年に入所して31年の歳月が流れました。最初の配属先は平城宮跡発掘調査部考古第一調査室で、部長が鈴木嘉吉氏、室長が町田章氏、室員には沢田正昭、佐藤興治、黒崎直、菅原正明、山本忠尚らの諸氏がいました。



毛利光 俊彦さん

当時は、新入所員が朝一番に来て、部屋の清掃をし、お茶を出すのが役目の一つでした。木製品などの整理や実測の手解きを受けるとともに、部屋での研究会に参加し、夕方からは酒宴もあって、次第に研究所の一員になってきました。

入所3年目に考古第三調査室に配属となり、以後、瓦との縁が続いています。内裏の報告書や法隆寺昭和資財帳で、瓦談義に華を咲かせたことが、今も楽しい思い出となっています。この途中で、考古第二調査室に移り、土器の世界も知りました。平成7年には長屋王邸の報告書を編集しましたが、その刊行は研究員諸氏の努力とともに、部長(町田章氏)の度重なる催促・指導に負うところが大きかったです。

翌年、入所21年目にして、平城宮跡発掘調査部を離れ、飛鳥・藤原宮跡発掘調査部に配属となり、新天地での発掘調査や研究に7年間を過ごしました。山田寺の報告書編集に没頭したことも今、思い返しています。

平成16・17年度はキトラ古墳に関わり、最後のこの1年は埋文センターで地方公共団体の職員に対する研修などに関わってきましたが、次第に退官を意識し、寂しい思いが日々深まっています。

先輩諸氏や御同輩、そして発掘調査や研究を支えて下さった作業員、補佐員、アルバイト諸氏に、研究所での楽しい生活をありがとうと、心より感謝申し上げます。

(埋蔵文化財センター長 毛利光 俊彦)

奈文研での時を振り返って

この3月で、いよいよ奈文研を定年退職することになった。就職の際、文化財関係の職場を希望していたので、それに沿った仕事に携われたことの幸せをしみじみ感じている。



綾村 宏さん

東京での勤務の2年余を除き、平城宮跡発掘調査部と歴史研究室でほぼ半々勤務した。平城・史料調査室では木簡の調査と平城宮京域の発掘調査、歴史研究室では南都諸大寺など伝来の古文書・経巻など書跡資料の調査と、文化財調査の最前線にいらせてもらったことになる。

発掘調査未経験の新入所員にとり、研修現場での巨大な一木造りの内裏の井戸の出現(いま復原整備展示されている)による衝撃を皮切りに、宮跡庭園、大嘗宮遺構、難解な東院地区など、いまでも記憶に残る現場が多い。現場での木簡の出土も結構経験した。木簡では、やはり長屋王家木簡の発見に関わったことが最大の出来事であろう。発掘現場班ではなかったが、次々運び込まれる膨大な量のト口箱中の泥にまみれた木簡の洗い出し、整理、釈文作成の作業を行う整理室の興奮と緊張感は忘れられない。

一方、書跡資料の調査は、南都の諸寺院で継続して行っている奈文研創設以来の仕事である。その業務を担当し、次の世代に引き継ぐことが出来た。文化遺産「古都奈良の文化財」は、土地、建物、そして本質的には信仰の対象である品々が一体として、現地に存在していることこそ文化遺産としての大きな価値といえよう。そのうちの書跡資料につき実態を明らかにしようと調査を行ってきた。文化財そのものは、数百年以上伝来してきたものである。そのうちの数十年間でも関わりを持てたこと、それが仕事の対象であったことにつき嬉しく思っている。

独法化以降、世の中のテンポがますます速くなってきた。手間ひまのかかる文化財の仕事と時間との兼ね合いが気になるところである。

(文化遺産研究部長 綾村 宏)